支へよふとしたのである」とは、戰勝記の著者の書いて居ることであるが、一方タリキ、ラシディにも、また此の播種のことを確かめるべき材料が見えて居る、即ち「帖木兒はモーガリスタン王黑的兒火者（キジルクワージャ）に迫つて、軍の糧食を作る爲にモーガリスタンの土地を耕やすことを許して貰ひたい」と申し込むで來た、と記してある、即ち播種の用意は眞實であつたことが知れるであらふ、尙ほ同書には、「帖木兒の軍は七年間を支ふるに足るべき乾草の飼料を携さへて居つたが、これはイラク及びルムの地方の行軍の常習である、支那とマヴァラウンナール（帖木兒の據れる中亞の地）との間は、耕地も人口もともに少い地方であるから、彼は各人に普通携帶品の外、尙ほ乳牛二頭、乳羊十頭宛を携さふべしとの命令を發し、乳と肉とによりて糧食の補をつけよふとしたのである」と見えて居る、兩書の記事に一致しない點はあるが、とにかく此等の細密な用意があつたものとうけとれる次第である、昔から支那や蒙古の軍隊が西域を征したことは度々あるが、かゝる準備のあつた例しはない、糧食が缺乏しても掠奪する人家はなく、歸るも行くも意に任せないで、或は沙漠の鬼となり或は荒野の住人と化した樣な始末は度々演出せられたことである、今帖木兒の軍旅の有樣を知るものは、誰しも彼が細密にして、然も雄大なる計畫に感ぜぬものはあるまい。

撒馬兒罕で此の如き計畫が立てられて、準備に怠りなかつた時に、永樂帝の方ではどんな手段が講ぜられて居つたか、此の點については殆んど何ごとも知ることが出來ないのである、勿論此の年即ち永樂二年には、まだ使は歸つて來ず、撒馬兒罕の消息も解らなかつたのであらう、その翌永樂三年になつて、始めて一寸した記事が見えて居る、即ち明史撒馬兒罕傳に「帖木兒が途を別失八里（ビシュバリク）（即ちモーガリスタン）にかりて兵を率ゐて東すと聞いて、甘